町目三丁目十一番地

渡辺茂男 作
太田大八 画

寺町三丁目十一番地

©一九六九年三月一日　初版発行
一九七九年八月一五日　第十刷

著者　渡辺茂男

発行　福音館書店
郵便番号一〇一—九一
東京都千代田区三崎町一丁目一番九号
TEL東京（〇三）二九二—三四〇一
振替・東京一一七六四五

印刷　精興社

製本　積信堂

NDC九一三／二三六ページ／一五×二二センチ

無理な扱いをしないのに、お買いあげ後一週間以内にこわれたような本がございましたら、お買いあげ月日、書店名をご明記の上、おそれいりますが、本社にご返送ください。責任をもっておとりかえいたします。

渡辺茂男　作
太田大八　画

福音館書店

父に捧ぐ

寺町三丁目十一番地

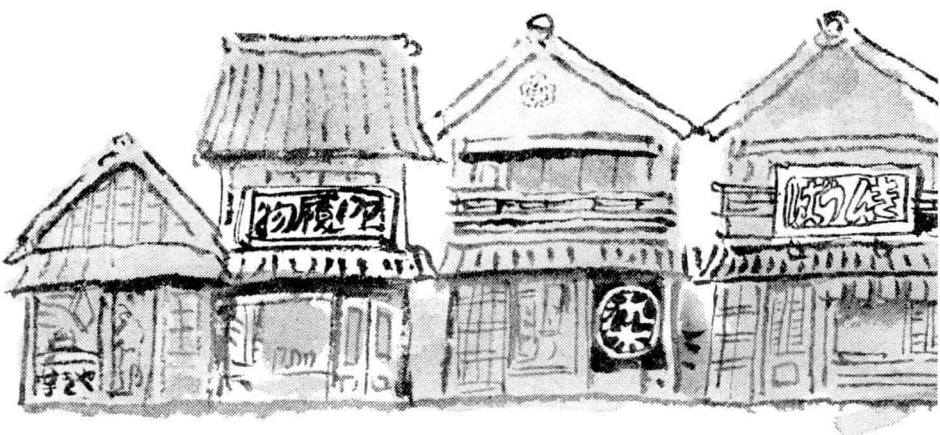
此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

これは、昭和十年ごろの
福(ふく)っつあん一家の物語です。

もくじ

馬に乗った写真屋さん……9
焼きいもときんつば……21
感応寺の決闘……32
ドンツクドンドン……49
きん上花をそえる……70
どろぼうさわぎ……83

海水浴……94
「仁がめくらになる！」……131
お命講……150
九プラス三プラス一……181
修羅の大晦日……193
大火……207



馬に乗った写真屋さん

福っつぁんの福地写真館は、寺町三丁目十一番地です。寺町三丁目十一番地というと、ずいぶんまっ香くさいところにきこえますが、福地写真館は、じつは、この市の繁華街スズラン通りに面しています。ただし、そのいちばんはずれの方に。

スズラン通りは、市の中央部を東西に走り、西の端は、せっちんづまりで、南北に走る寺町通りに、丁字路になってぶつかり、ぶつかったところに、寺町巡査派出所があります。

福地写真館は、スズラン通りの西の端の南が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わのかどから二軒目で、かどは、子どもたちが、「じいちゃんの店」とよぶ雑貨屋兼駄菓子屋です。福地写真館の右どなりは、村井時計店、望月タクシー、長谷川酒店とならんでいます。向かいがわは、かどから、ミノダ・バーバー、小林薬局、小川鮮魚店、バー黒猫とならんでいます。こちらがわも向かいがわも、次のかどまで、まだ何軒か店があるのに、どういうわけか、ここまでが、寺町三丁目で、その先は、スズラン通り一丁目というかがやかしい通りの住所に変わってしまいます。

南北に走る寺町通りは、文字どおり、寺が、南から北にかけて、ずらりとならんでいます。少林寺、点禅寺、摂取寺、浄林寺、宗教寺、倉長寺、安立寺、妙音寺、感応寺などなど。

寺町通りには、お寺と向かい合わせに、花屋、経師屋、ちょうちん屋、紋屋、だんごやまんじゅうを作っている和菓子屋、お灸のもぐさ屋、せんべい屋、きんつば屋、染物屋、下駄屋、それから焼きいも屋などがならんでいます。

寺町通りを背にしてスズラン通りをのぼっていくと、一つめのかどから両がわにスズラン燈がならび、急に、にぎやかな感じになります。スマートな感じと、いうのかもしれません。一つめのかどのさくら湯という銭湯はべつとして、パン屋、くつ屋、映画館、肉屋、ケーキやパンを売っている洋菓子店、本屋、文房具店、レストラン、ドレスショップ、洋品店、銀行などがならん

ています。

スズラン通りは五丁ぐらいつづき、そのつきあたりに県庁が堂々とそびえています。

県庁の手前の左がわのかどが警察署、右がわのかどが市役所で、県庁の前の広い通りを市電が走っています。県庁の前には、外濠をうめてつくった広場があり、うしろがわは、また道路をへだてて内濠があり、古い大きな石がきが、徳川家康の隠居の城址をかこんでいます。石がきの上には、幹が、二かかえも三かかえもあるような、みごとなみどりの松が、一間おきぐらいにはえています。そして、この内濠と外濠の間にある、東の馬場のあとに東小学校、西の馬場のあとに西小学校があり、どちらの小学校の二階からも富士山が見えます。

東小学校の校庭では、朝礼がはじまったところです。元場校長先生がかぜをひいて休んだので、教頭の木戸先生が、朝礼台の上にたって、朝のお話をしています。木戸先生は、からだが大きくて、首が太くて短く、黒いふちの丸いめがねをかけています。口が大きく、くちびるが厚くて、声がふといのです。

「あー、新学期がはじまって、きょうで二週間たちました。あー、一年生のみなさんも、あー、こうやって、二年生や三年生や四年生や五年生や六年生のおにいさんたちや、おねえさんたちと、いっしょに、朝礼、あー、朝のごあいさつの時間に、あー……」

六年生の仁は、さっきから、木戸先生のお話には、うんざりしていました。六年一組の副級長をしている仁は、ひとの前では先生のあだ名をあまりいわないことにしています。けれども、今は、心の中で大声でわめいていました。（カバさん、やめてくれ！　その、あーっていうのが、さっきからもう三十六回、五秒に一回ぐらいあーとやるから、十五分間話すとすると、一分が六十秒だから、五秒で一回なら一分で十二回、十五分でその十五倍、えーと、十分で百二十回、五分の六十回をたして、ぜんぶで百八十回のあーか！）

「あー、ですから、上級生のおにいさんたちやおねえさんたちは、あー、下の学年の人たちを、あー、自分の弟や、あー、妹と思って、かわいがってやりましょう。あー……」

（カバさん、ぼくはね、毎日、自分の弟や妹を四人、学校までひっぱってくるんです。四年生の磐、三年生のきく、二年生の信人、それから、一年ぼうずの勝人……）

「あー、きょうは、なかよしということについて、あー、お話をしましょう。」

木戸先生は、ひとさしゆびで、めがねのまん中を、ちょいと上にあげて、両手をうしろに組みました。

「あー、むかし、オランダという国に、あー」

仁は、やれやれと思いました。また、二年生か三年生のきく、やさしいお話がはじまるのです。

「あー」

ところが、木戸先生は、うしろに組んでいた手を、腰のところにあてて、急に、背中をぴくんとのばして、だまってしまいました。（あれっ、どうしたんだ？）仁は、木戸先生の顔をみました。木戸先生は、校門の方をびっくりしてみつめています。朝礼台の下に、生徒の方をむいて一列にならんでいたほかの先生たちは、どうしたことかと、みな、いっせいに木戸先生の顔をみあげました。

「先生、木戸先生、どうかなさったのですか？」

朝礼台のすぐ横にいた仁の組の受持ちの武田先生が、木戸先生を見あげてききました。木戸先生は、校門の方をゆびさして、

「あれ、あれを見てください。」

武田先生は、朝礼台の上に、とびあがって、そのゆびさす方を見ました。

そのころまでに、校庭にならんでいた何百人という生徒たちも、木戸先生のへんなようすに気づいて、ざわざわとさわぎだしました。校門に近い、列のうしろの方にならんでいた生徒たちは、列をみだしてさわいでいるようです。生徒たちをしずめようとしてうしろの方に走っていく先生もあります。そのとき、体操のとくいな武田先生は、両手を上にあげて、大きな声でいいました。

「さあ、みなさん、両手を上にあげて深呼吸、いーち、二、いーち、二、もう一度、いーち、二、いーち、二。」

ざわめいていた生徒たちも、武田先生の号令につられて、両手をあげて深呼吸をはじめました。

「いーち、二、いーち、二、ようし。さあ、静かになったら、いま、先生が、この台の上から見たものを教えてあげよう。写真屋さんが、門からはいってきただけです。ただ、写真屋さんは、馬に乗ってはいってきたものですから、木戸先生は、ちょっとおどろかれたのでしょう。」

生徒たちは、それをきいて、いっせいにわらいました。先生たちも、わらいました。

ところが、仁は、からだじゅうが熱くなりました。顔の目の下あたりは、火がふきそうな感じになりました。はずかしいのか、つらいのか、かなしいのか、頭も胸も、かっかっするばかりで、その気持を何といいあらわしていいのかわかりませんでした。

（ちきしょう、おとうさんのばか！　ばかおやじ！）

おとうさんは、この四月から、六年生の卒業アルバムを作るために、ときどき、写真をうつしに学校へくることになっていたのです。学級全体で写真をうつすときに、仁は、友だちからいろいろいわれるのが、とてもいやでした。

「あれ、おめえのおとうさんずら？」とか、「おまえのおやじは、写真屋か？」とか、「副級長

のとうさんは、写真屋さん。」とか、よく考えてみれば、はずかしがることは何もないのに、はずかしくてたまりませんでした。

おとうさんが、時どき写真機や乾板のはいった大きな四角い箱をさげて学校へくるということだけで、仁にとっては、じゅうぶん、精神的な負担になっていたのに、何と、けさは、朝礼のまっ最中に、馬に乗ってのりこんできたのです！　馬に乗った写真屋！

ああ、万事休す！　ぼくは、もう学校がいやだ！

仁は、絶望的になってしまいました。

そのあと朝礼はどうなったのでしょう？　木戸先生は、気をとりなおして、オランダの話をしたらしいのですが、仁は、もう、「あー」の回数を数えることさえわすれてしまいました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com